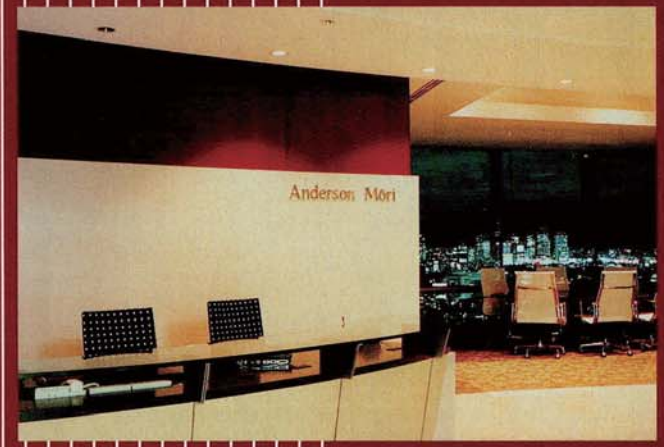
Introduce——

アンダーソン・毛利 法律事務所

働くプロフェッショナルのために、オフィスの快適性と利便性を最大限に追求

1950年に、ジェームス・B・アンダーソン氏とアーサー・K・毛利氏の2人の弁護士により創設されたアンダーソン・毛利　法律事務所。以来、国際企業法務の分野で、一般的な企業法務のほか、金融・証券、知的財産権、電子商取引など総合的な法律事務サービス(リーガル・サービス)を提供している。

同事務所は、今年7月、業容の拡大に伴い手狭になった丸の内のオフィスから、六本木に新たに竣工した泉ガーデンタワーへ移転した。新しいオフィスは、45階建てのビルの36階から38階の3フロア、合わせて約1,600坪のスペースに、110人以上のプロフェッショナル・スタッフと120人以上のサポート・スタッフが働く。



東京の街並みが一望できる開放感溢れるオフィスは、スタッフ全員がそれぞれ個々の能力を十分に発揮しながら共同して業務を推進するために、快適性と利便性が最大限に追求されている。

クライアントに安心感と
スタッフが最大限に能力

▲サポート・スタッフの執務スペース

個室との間仕切りにはガラスを用い、窓からの外光が届き、見通しのよい執務空間は明るく開放的。

▲プロフェッショナル・スタッフの個室

完全に独立した執務環境で集中力を高めるとともに、非常に大きな開口部である窓からの眺望により、イマジネーションやインスピレーションが湧出される。

信頼感を持ってもらい、を発揮できるオフィス

スタッフが連携して働きやすい環境をつくる

アンダーソン・毛利 法律事務所のオフィスは、36～38階の3フロアとも、窓辺に弁護士や弁理士などのプロフェッショナル・スタッフの個室と会議室を並べている。天井から床までがすべてガラスの窓から望む東京の街並みは、柔軟な発想と豊かな創造力を湧き出させる触媒として最適だ。オフィス中央部は、サポート・スタッフの執務スペースだが、キャビネットやパーティションは低いものを採用し、オフィス全体の見通しをよくし、ゆとりのある空間を構成している。デスクはグループごとに「車座」に配置し、簡単なブリーフィングは席に居ながら行える。オフィス内の動線は、曲がりくねっていて一見歩きづらそうだが、十分な間隔があるので歩きやすいし、かえって「近道」だったりする。また、「出会いの機会」が増えコミュニケーションが密になる。連携し共同で業務を進めることが多い法律事務所にとって、理と情の両面から働きやすい環境をつくる仕組みとなっている。

▼大会議室
約50名が収容できる大会議室。マイクや視聴覚設備も整い、セミナーにも利用されている。

▶ライブラリー
法律の専門書や判例集などが、図書館の開架書棚同様の設備で並べられており、共用で利用するのに、非常に便利である。

▶小会議室
参加人数や目的に応じて使い分けられるよう、仕様を変えて15室用意されている。この部屋に置かれているテーブルの中央にはLANケーブルが格納されており、パソコンを持ち込んでの作業も容易に行える。

リーガル・サービスの質の高さをわかってもらう

オフィス全体のデザイン・コンセプトについても熟考が重ねられている。華美なデザインでは信用されない。かといって、垢抜けない雰囲気では能力を疑われてしまう。金融や国際経済などに関するこれまでになかった全く新しい問題について相談にくる企業に安心してもらえるよう、洗練されたオフィス・デザインを徹底した。受付や相談者との面談や共同作業の場となる会議室は落ち着いた色調とし、テーブルやイスなども機能性を重視した家具を配置している。また、調度品は心地のよいデザインのものを選ぶとともに、壁に掛けるレリーフなどを特別に頼んで制作している。乱雑なオフィスでは、いくら能力がありますといったところで信用されない。難しい問題にも的確に対応できる法律事務所だと信頼してもらえることが何よりも大切だ。そして、その信頼に応えようと働くことが、スタッフの誇りにつながる。